

ドキドキわくわく あたらしい本 えほん

2024.4

たべてみて!

フリーダ・キャフランがひろげた食のせかい

マラ・ロックリフ 文 ジゼル・ポター 絵

福本由紀子 訳 BL出版

やさい・くだもの市場^{いちば}ではたらいていたフリーダ^な。何か新しいものをため^なてみては、とマッシュルーム^うを売りはじめました。最初^{さいしよ}は売れませんでした^なが、フリーダはあきらめません。するとそのうち、みんながマッシュルーム^{いま}をたべるようになりました。今では^{みちか}すっかり身近なやさいやくだものを、アメリカの市場^{はなし}でさいしよに売りはじめたフリーダのお話^{はなし}です。

ネコになりたかったクモのルイージ

ミシェル・ヌードセン さく ケビン・ホークス え

福本友美子 やく 岩崎書店

すむところをさがしていた、けがもじゃもじゃのおおきなクモ。ふるいいえをみつけてはいつてみると、そこはこネコをかいたいとおもっていたおばさんのいえでした。おばさんはクモをみつけると、ルイージとなまえをつけて、ごはんをくれたり、いつしよにおもちやであそんだりしました。ルイージはおばさんをよろこばせようと、ネコのふりをすることにしました。

低学年

たんじょう日をとりもどせ!

井上よう子 作 八木橋麗代 絵
岩崎書店

きょうは六月二日。りおのたんじょう日です。それなのに、おとうさんもおかあさんもしごとです。あさねぼうしてカレンダーをみると、六月のカレンダーから2だけきえています。さがしてみると、いえの中のぜんぶのカレンダーから2がきえています。りおは、2がとんでいくのを見て、おっかけることにしました。りおのたんじょう日の2はみつかるでしょうか。

モジモジばあは、本の^{ほん}おいしゃさん

仁科幸子 作
文溪堂

はたらきアリのアントンとアンティは、ある日、山のなかのちいさな町^{まち}の図書^{としよ}館^{かん}にまよいこんでしまいました。ふみつぶされそうになったときに^{たす}助けてくれたのは、奇妙^{きみょう}なアリのおばあさん、モジモジばあでした。モジモジばあはくたびれた本^みを見つけて元氣^{げんき}にしているらしいので、アンティとアントンはようすをみることにしました。

羽根にねがいを！

西沢杏子 作 小松良佳 絵
国土社

幼なじみの陶子と真也は、俳句好きのおじいちゃんの弟子。

ある日、陶子は真也から、カラスの黒い羽根をもっているように、といわれる。どうやら「両思いの子が二人でカラスの黒い羽根を身につけて秘密を守るとねがいがかんう」という夢をみたらしい。勝手に両思いって決めつけないで！と思いつつも、陶子のラッキーアイテムは「黒」と「鳥」。大切にポケットにいれて、身につけることにした。

真也がかねえたいねがいは何なのか。そしてその願いはかなうのか。二人がよんだ俳句も楽しめるお話。

ふでばこのくにの冒険

-ぼくを取りもどすために-

村上しいこ 作 岡本順 絵
童心社

ある朝、目がさめた場所はいつものふかふかのベッドでなく、つくえの上だった。思わずはねおきしてみると、おき時計のながい針とおなじくらい、ぼくのからだはちいさくなっていた。するとまっ黒なふでばこから、えんぴつがとびだしてきて、ここはふでばこのくにで修人という男の子のへやだと教えてくれた。まわりでは、コンパスや消しゴムたちがニヤニヤわらいながらぼくを見ている。

ぼくは、自分がこのへやのボスである小学4年生の修人だと思いこんでいたけど、どうやら修人が3Dプリンターでつくったフィギュアだということがわかった。

高学年以上

となりのきみのクライシス

濱野京子 作 トミイマサコ 絵
さ・え・ら書房

新学期を迎え、6年1組に進級した金沢葉奈。彼女のクラスには、父親の家庭内暴力や、母親からの干渉、弟ばかりひいきする祖父、そして教師からのセクハラに悩み苦しむクラスメイトがいた。それらのことを見聞きする中で、葉奈自身もつらく悲しい気持ちになった。そして、自分自身にも危機(クライシス)が近づいていることに気づき始めた。

ある日の帰りの会、新たにクラスの担任となった大西先生は、「今日は、子どもの権利条約について少しお話ししたいと思います」と、少し改まった口調で言いました。

直紀とふしぎな庭

山下みゆき 作 もなか 絵
静山社

十歳の誕生日をむかえた直紀の住む街に、大学を卒業したおじさんが、帰ってくるようになった。以前は、直紀の家に一緒に住んでいたおじさんだったが、こんどはひとり暮らしするといつて、直紀と二人で部屋探しをはじめた。

そんなある日、部屋探しをしていた二人の前に、白い子猫があらわれる。気になった二人が、子猫のあとをついていくと、古い貸家へとはいっていった。おじさんは、その家が気に入り、そこをかりて住むことにした。

直紀もその家の庭がとても気に入ったが、そこはふしぎなものが集まってくる庭だった。